

# 言語文化教育のポリティクス

2017.2.25土~26日

会場

関西学院大学上ヶ原キャンパス G号館

9:30-18:00 **25土**

プログラム 大会シンポジウム 言語文化教育のポリティクス  
シンポジスト 庵功雄、寺沢拓敬、有田佳代子  
口頭発表、ポスター発表、フォーラム、ほか  
コーディネーター 牲川波都季

10:00-16:00 **26日**

委員会企画フォーラム  
プログラム 経験から編み直す言語文化教育ポリティクス—M-GTAを例として  
口頭発表、パネルセッション、フォーラム、ほか  
登壇者 木下康仁、根本愛子、中井好男  
コーディネーター 牛窪隆太

会員 1000円 非会員 2000円 参加費

<http://alce.jp/annual/> 詳細情報

[annual@alce.jp](mailto:annual@alce.jp) 問い合わせ

テーマ趣旨

本大会は、言語文化教育・学習者、教室・機関等を取り巻く、あるいはその中にある大小の力関係を、言語文化教育のポリティクスとして問いなおすことを提案します。自律的な言語文化教育者は、自らの教育理念を探索し続ける存在です。しかし不安定な雇用形態にあっては、雇用者側の意向に従わざるを得ないかもしれません。あるいは同僚の何気ない一言が、目に見えない力となって授業実践の幅を狭めることもあるでしょう。教育理念を実現すべく、本大会はまず、言語文化教育を規定する権力構造の把握を重視します。また 1980 年代末以降の国民国家論の議論は、言語文化教育が単なるスキル育成の場ではなく、人々を断絶し力の差を生み出す場でもあることを明らかにしました。現在はグローバル人材育成の文脈で、英語能力の有無が富と力の格差につながるの自然という言説が流布しつつあります。言語文化教育がもたらす権力関係にも、改めて注目していく必要があります。では、これらの言語文化教育に／が関わる権力関係、さらに広い意味での力関係を解決するためには何ができるのでしょうか。新しい言語文化教育政策案、教育者同士の協働、経済的成功に収斂しないことばの教育など、すでに斬新な提言・実践が始められています。ポリティクスの網の目を解きほぐし言語文化教育の可能性を広げることを、本大会はめざします。

25日 10:00-12:30

大会シンポジウム 言語文化教育のポリティクス

概要

大会シンポジウムでは、言語文化教育の教育・研究内容を規定する構造的問題に目を向け、(1) 日本語教育と政策、(2) 英語教育と政策、(3) 言語教師の社会的・規範的位置付け、をテーマに、現状の問題点と乗り越えの可能性について発表と議論を行います。

シンポジスト

**庵功雄 (いおりいさお)** 一橋大学国際教育センター教授。大阪大学文学研究科修了。博士(文学)。大阪大学文学部助手、一橋大学留学生センター講師、准教授を経て、現職。専門は、日本語教育、日本語学。主著に、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク、2001年。共著)、『新しい日本語学入門(第2版)』(スリーエーネットワーク、2012年。単著)、『日本語教育、日本語学の「次の一手」』(くろしお出版、2013年。単著)、『やさしい日本語』(岩波新書、2016年。単著)がある。

**寺沢拓敬(てらさわたくのり)** 関西学院大学社会学部助教。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員(PD)、オックスフォード大学ニッサン日本問題研究所客員研究員を経て、現職。専門は、言語社会学、英語教育制度とその歴史。主著に『「なんで英語やるの?」の戦後史』(研究社、2014年。単著。日本教育社会学学会第6回学術奨励賞受賞)、『日本人と英語』の社会学』(研究社、2015年。単著)がある。

**有田佳代子(ありたかよこ)** 敬和学園大学人文学部特任准教授。東京およびホーチミン市の日本語学校・専門学校、敬和学園大学契約講師を経て現職。一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程単位取得退学。博士(学術)。専門は日本語教育、多文化共生論。単著は、『日本語教師の葛藤—構造的拘束性と主体的調整のありよう』(ココ出版、2016年)。共著は、五味政信・石黒圭編著『心ときめくオキテ破りの日本語教授法』(くろしお出版、2016年)、石黒圭編著『日本語教師のための実践・作文指導』(くろしお出版、2014年)、石黒圭編著『会話の授業をたのしくするコミュニケーションのためのクラス活動40』(スリーエーネットワーク出版、2011年)。

コーディネーター

**牲川波都季(せがわはづき)** 関西学院大学総合政策学部准教授。早稲田大学大学院日本語教育研究科修了、博士(日本語教育学)。早稲田大学日本語研究教育センター助手、ホープカレッジ現代古典言語学部客員助教、秋田大学国際交流センター准教授などを経て、現職。専門は、言語表現教育、日本語教育、言語ナショナリズム。主著として、『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望』(三省堂、2004、細川英雄との共著)、『戦後日本語教育学とナショナリズム—「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』(くろしお出版、2012)がある。

26日 10:00-12:30

委員企画フォーラム 経験から編み直す言語文化教育ポリティクス—M-GTA を例として

概要

本フォーラムでは、方法論だけでなく、質的データ分析法について理論的な理解を深めることを目的として、M-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を取り上げます。日本語教育分野で M-GTA を使って実施された研究事例を取り上げ、登壇者に研究の背景について話題提供をしていただきます。そのうえで、M-GTA の開発者である木下康仁氏(立教大学)に「なぜ M-GTA を考案する必要があったのか」という根本についてお話をうかがいます。本フォーラムの議論を通じて、研究者が自身の実践フィールドで研究活動を行う意味について、参加者それぞれの理解が深まることを期待します。

登壇者

木下康仁(立教大学)、根本愛子(国際基督教大学)、中井好男(同志社大学)

コーディネーター

牛窪隆太(関西学院大学)

参加方法

参加自由。事前申し込み不要。

\* 予稿集は学会ウェブサイトよりダウンロードしてください(紙媒体でのご用意はありません)。2月中旬公開予定です。